

国際京都学だより

第十二号 二〇一〇年（平成二十二年）五月三十一日（月）

「圏外」でない豪の辺地

田中真澄（岩屋山志明院住職）

一昨年、私はオーストラリアに行く機会をもつことができた。目的の一つに旧友のロイヤル・タイラーさんを訪ねることがあった。彼は「源氏物語」五十四帖を英訳して話題になり、特に千年紀ではさまざまなセレモニーに登場し、脚光を浴びた学者である。

京都をこよなく愛し、自然の風景が好きで志明院にも来山するようになった。いつも変わりゆく京の景観、環境を心配し、二十年前に起きた鴨川ダム問題の反対運動にも加わってくれた。

若い時から日本文学を研究し、そこに新たな解釈を提示し、専門家を驚かすようになった。

その彼が日文研の客員教授となり、アメリカ、ノルウェーの各大学で教鞭をとった後、九〇年にオーストラリアの大学に移った。その時はキャンベラ市から約二百キロ離れた辺地に五百ヘクタールほどの土地を手に入れ、アルパカの飼育を始めたのである。なぜそんな奥地でと驚いたが老齢期になっての暮らしを奥さんのスーザンさんと考えた揚げ句の決断で彼らしい選択だったと思う。都会生活には馴染めない二人にとって自然の中での営みが最優先であった。

レンタカーで市街地を過ぎると民家は少なくなり、見渡す限り平原と丘陵地が広がるばかりである。こんな辺地でと暮れゆくなかに不安をもちつつ牧場に着いたのは夜になってからであった。

三日間の短い滞在であったがアルパカのゆったりした歩く風景、彼らを守る一匹の犬。隣家も人も見えぬ視界、満天の星が今にも降って

きそうな夜の世界、星明りに動くウォンバット、まさしく別天地である。

大自然の辺地での生活に不便はつきものであるがここでは通信機能が整備されており、インターネット、地デジ、携帯電話など情報の共有は都会と変わらないのであり、辺地での生活を支えているのである。一地域の事だけでとやかく言えないかも知れないがふと日本のことを考えずにはいられなかった。

オーストラリアに比べれば二十分の一ほどの小さな島国である。古来、豊かな森、川の恵みがあり、農林漁業とともに文化、歴史を培いながら、山村、田舎としての豊かな暮らしがあった。だが今や、都会から百キロはおるか十数キロで辺地といわれ、山村は疲弊し、限界集落などといわれる地域も都会の近くまで迫っている。

そして今、インターネット、地デジ、モバイルなどの機能も「圏外地」として浮かび上がってくる。数年前まではここに集落があり、文化、歴史を育んでいたと何度聞かされた事か。都会も山村もお互いにつながりあって社会が構成されなければならない。少なくとも科学技術の整備は山村にこそ不可欠である。当山のある北区雲ヶ畑でさえも僻地といわれ、携帯電話も「圏外」が多い。

オーストラリアは今、初秋を迎えようとしている。タイラーさんは平家物語の英訳に励みながら、インターネットで取引し、六百キロ離れた地にアルパカをトラックで運ぶという。七十歳を過ぎた彼のエネルギーシユな行動は、多くの不便はあっても生活環境の基盤があるからである。



編集：国際京都学協会事務局

〒六〇四八三八三 京都市中京区西ノ京小堀町二五三

ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>

Eメール info@kyotogaku.org

発行：国際京都学協会

題字は書家・杭追柏樹（くいせはくじゆ）氏

第十六回 国際京都学体系研究会(二〇〇九年四月十六日)

「京都からの日本史」―鎌倉時代は本当に鎌倉の時代だったのか?

井上章一(国際日本文化研究センター教授)

歴史をつくっているのは誰か。時代区分に弥生時代という言葉がありません。明治十七年、東京帝国大学理学部の人類学者が本郷の弥生町で土器を見つけました。それで弥生式土器、弥生時代というようになりしました。だが、あの土器の第一発見者は京都の藤貞幹という好事家で、その一〇〇年ほど前に岡山で同じ土器を見つけ図録を出している。にもかかわらず、岡山式土器とは呼ばれず弥生式土器と言います。実は、明治二〇年代には弥生式土器と言うのは東大だけの隠語だった。ところが大学の意向により、明治三〇年代中ごろから弥生式という言葉が交わされるようになり、歴史教科書に定着するようになりました。

古墳時代を特徴づけるのは前方後円墳で、最初に前方後円墳ができ始めるのは奈良の纏向で、いま邪馬台国の本拠地だろうと言いつつ出している。しだいに巨大な古墳は南大阪にできるようになったにもかかわらず、歴史教科書は纏向時代とか河内時代と言わず古墳時代と言う。纏向時代はともかく、河内時代という言い方は勘弁してほしいということなのか。

たかが弥生町で見つかっただけで弥生時代という名前が全国津々浦々に流れる。実際に河内に巨大な古墳があるのに、河内時代と言わずに古墳時代と言ってしまう。そこらあたりには歴史教育を左右しているのは、どういう人たちのだろうかということが透けて見えてこないか。

本題の鎌倉時代に入るが、私は幼いころ、こんな風に聞いた。平清盛は京都に残っていたので公家風の文化に染まり、武人としては墮落してふ抜けるような存在になってしまった。源頼朝は関東地方に残ったので武家として

の健やかな魂を保つことができ、おかげで武家の都を築くことができた。これは何だと思われませんか。京都にいと人間は腐る。関東平野にいと人間は健康にはぐくまれる。いったいこんな情操教育を歴史に名を借りて、誰がやっているのでしょうか。清盛は京都に残ったので武人としては腐ってしまったという言い方が、ものの本に登場するのは明治時代よりあとになってから。少なくとも私が調べた限り、それ以前には見つけることができません。

学校で平安時代までを古代史として習い、鎌倉時代を中世の始まりとして教わります。公家と寺が支配していた古い古代を、武家が打ち倒して新しい中世をつくる。それが鎌倉時代、中世の幕開けであり、「いいくに(一一九二年)つくろう鎌倉幕府」と言つてことほいだわけです。新しい近世は江戸時代だと言われました。それまでの乱れきった戦国の世を最終的にまとめ上げて安定した時代をこしらえたのは江戸幕府。そして近代は明治の東京奠都以降。この歴史をおわかりでしょうか。新しい中世、新しい近世、新しい近代は常に関東地方で始まっている。いったい誰がこんな歴史を組み立てたのか。中心の勢力が関東に移れば、世の中は新しく新鮮にさわやかになる。近畿に残っているあいだは腐つてよごんだ腐敗した古い時代が続くと言わんばかりの歴史教育を私たちは受けてきたわけです。

鎌倉には警察力にあたるものや軍事力にあたるものもありました。その意味で、現代風に言えば市ヶ谷と桜田門はあったと思います。しかし、私たちが国政の中枢として考えるのは永田町であり、霞が関ではないか。鎌倉は小さいまちで永田町や霞が関があったとは思えない。メインストリートの若宮大路は二キロほどしかない。平安京のほうがはるかに大きく、商業も文化も物流も京都を中心にして回転していた。にもかかわらず、鎌倉時代と言いますが、あんなものは平安時代後期でいいと思う。実は、明治一〇年ぐらいまでは鎌倉時代も含めて摂関時代と教えているものが多い。それがいつの

間にか鎌倉の時代だと呼ばれるようになりました。

古代のイメージはギリシヤのパルテノン神殿。ローマの水道橋、コロシム。地中海で紀元前五〇〇年ごろに、アテネやテーベなどの都市国家ができ、ピタゴラスをはじめとする科学、プラトンをはじめとする哲学、そして芸術がはぐくまれた。それから、ローマ時代の彫刻、建築、あるいはキケロ、セネカをはじめとする古典文献への尊敬を込めて、ヨーロッパ人たちは、それを古代と言い習わしてきました。小さい都市国家が紀元前四、五世紀にでき、最終的に強大なローマ帝国が一つにまとめ上げる。これが古代史です。

ところが、北東からゲルマン人が移ってきました。西ローマ帝国は最終的に壊され、ローマの文化遺産を受け継ぎながら、ゲルマン人がフランク王国、ゴート王国、ブルグント王国とかをつくっていくのが古代から中世への移り変わりです。地中海のローマ帝国を北方からやってきた言葉は悪いが野蛮人たちが壊していくことで中世が幕を開ける。

ほぼ同じ歴史が中国にもあり、紀元前六〇〇年ごろ、丘の上に神殿があつて、そのまわりに市民が住み、周辺を城壁で囲った小さい都市国家がいくつもできました。この春秋時代に孔子や孟子をはじめとする古典ができます。その意味では春秋時代の中国の都市国家は、地中海のギリシヤの都市国家になぞらえられる。この都市国家が戦国時代の争乱を経て、始皇帝の秦という国に統一され漢という帝国になる。黄河流域の中国に北方から匈奴や鮮卑など異民族が入ってきた。漢帝国は瓦解し、魏・呉・蜀と言われる三国時代を経て、五胡十六国と言われる異民族の小さい国が乱立する乱世を迎える。

小さい都市国家ができて、現代に伝わる古典がそこではぐくまれる。それが強大な帝国によって統一される。そして北方から入ってきた異民族がローマをまねながら自分の国をつくる。ここまでもそっくりです。地中海と中

国の黄河流域はほとんど同じ歴史を繰り返している。匈奴が鮮卑との勢力争いに負けて西に移動しスラブ地方にまで移り、ヨーロッパの人たちからフン族と呼ばれる。このフン族がゲルマン人を追い落としてローマ帝国を崩壊に追いやる。ユーラシアはまったく別の歴史を経ているのではなく、ここには世界史がある。北方の異民族が強大な帝国を壊す歴史は、たまたま似ているのではなく、同じ遊牧民によって事態は引き起こされていると考えられます。

私が歴史家として一番尊敬している京都大学の宮崎市定先生は、ゲルマン人が古代ローマ帝国を倒して中世のヨーロッパをかたちづくるのと同じように、中国では北方から入ってきた異民族、匈奴と鮮卑が漢帝国を壊して、以後、魏・呉・蜀の三国時代、あと五胡十六国時代になる、これを中国の中世史だと位置付けた。都市国家から帝国、帝国が異民族による崩壊、これがユーラシアに共通する中世史だと考えたわけです。

内藤湖南は三世紀の漢帝国の崩壊以降を中世史にしています。ヨーロッパの西ローマ帝国の崩壊は五世紀です。ですから、ヨーロッパは五世紀から中世になり、中国、東アジアは三世紀から中世になるといって、そういう見通しを京都大学は持っています。東京大学はこういう見通しを持たず、漢帝国以降の魏・呉・蜀の三国時代も、隋・唐も含めて古代史にしています。もしヨーロッパが、ローマ帝国が壊れてゲルマン人の国ができることで中世と言ふのなら、東アジアも漢帝国が壊れ、北方異民族の国々ができることが中世と呼ばれるべきだ。これはもうまことに理にかなった時代区分だと私は考えます。

そうすると、中国の三国時代、魏・呉・蜀の三国志の時代は中世なのです。日本の邪馬台国は魏という国と国交を持っていました。邪馬台国の話が載っているのは『魏志倭人伝』です。そうすれば、日本中世史は卑弥呼の

時代から始めるべきなのではないかと私は考えるわけです。東アジアでも、弥生時代以降、古墳時代に入っただんどん大陸から人がやって来て倭国ができあがるとすれば、ブルグント王国とあまり変わらないような位置付けになるので、そこから中世を始めていいのではないかと私は思います。にもかかわらず、なぜ九〇〇年も離れた鎌倉時代で中世を始めたのでしょうか。

一〇世紀からが中国の中世だと言いつ出した理由にこのようなことがあります。中国に学び、唐の律令を取り入れて「大宝律令」をつくった八世紀は日本史では古代になります。唐の長安をまねて平城京ができるわけです。中国の中世都市をまねながら、日本の平城京という古代都市ができるといふ話は変ですから、日本中心主義的に中国史を並べようという思惑がはたらいた。日本の八世紀が古代である以上、中国の八世紀も古代だという考え方が根っこにありました。だが、中国の唐が中世ならば、いままでの平城京を古代だと言ってきた日本史が間違っていたのかもしれない。ヨーロッパは五世紀、中国は三世紀から中世が始まるならば、七〇〇年から九〇〇年も遅れて日本中世史が始まるというのは変なのではないか。

ヨーロッパと中国にわたるユーラシアの世界史を構想する宮崎史学にならざるを得ない。ふに落ちるものを感じます。世界に先駆けてルネサンスを成し遂げたのは、アラビアのアッバース朝であり、続いて中国の宋であり、ずいぶん遅れてイタリアが始まるという。日本の研究者たちはヨーロッパが一番だという思いを持っていたから、アラビアや中国がルネサンスを始めるといふ見方になじめなかった。宮崎先生はそういう思い込みに流されずに、さまざまな文化の民衆化という趨勢も、中国では北宋の時代に始まり、アラビアでアッバース朝の時代に始まると。これを近世、近代と考え、それは世界史に先駆けていると考えたわけです。

宗と交易を持っていたのは平清盛でした。日本史のいままでの枠組みに従

うと、日宗交易は古代の日本と近世の中国の国際交流になる。これはおかしいのではないか。そもそも、何で西洋の中世史は五世紀に始まって、日本の中世史は十二世紀に始まるのか。そういう疑問をはぐくんできてくれない歴史教育に憤りを感じます。(文責編集部)

第十七回 国際京都学体系研究会(二〇〇九年六月三日)

大文字五山送り火におけるコスモス創造と伝統の生成継承

和崎 春日(中部大学教授)

左大文字を中心に大文字の五山を三〇年前から調査してきました。京都の西の等持院で生まれ育ったので、左大文字は地元ですが保存会会員ではありません。左大文字は、歴史学の井上定幸さんや林屋辰三郎先生の研究はあったわけですけれども、米山先生の祇園祭、藪田稔先生の江戸三社祭といった都市人類学から切り込んでみようと関心を持ちました。

都市文化における開閉ということ、伝統文化の開く、閉じるということを焦点にして話をします。都市論として京都は閉じていると言われ、ある部分はそうだと思います。閉じているというのが聖なるものを担っていくエネルギーにもなるわけで、京都でも都市である限りは、どこかで開いていないと都市の行事とはなり得ないのです。

百万人、百五十万人という市民が何百年のあいだ聖なるものを保っているという意味では閉鎖性や伝統性という論理で説明できなければいけない。その一方、祇園祭であろうと五山送り火であろうと、開かれた都市社会の文化だという論理がちゃんと説明できなければいけない。

起源論について申しあげますと、右の如意ヶ嶽の大文字がもっとも古いということはありません。左大文字、左という修飾語が付いているわ

けですので、民間信仰論的には宮中、御所の池に映ったとか、相互に照らし合うのだとか、さまざまな考え方があります。銀閣寺との関係や金閣寺との関係も間違いなくあります。妙法は「南無妙法蓮華経」いう日蓮系、法華系の地域文化を色濃く残していることは間違いありません。船形は諸説がありますけれども、麓の和尚が中国に修行に行つて帰りの船が難破して、それを乗り越えてこられたという伝承があります。

歴史的には近世の文書がたくさん出ますので、三百年、四百年の歴史は間違いなくあります。伝承ではもつと古くにさかのぼると言われ、市原野の「い」というのもあったし、「蛇」の形をした山もあって、五山以外にいくつかの山で灯していたことも間違いありません。歴史的にどうこう言うよりも、何百年ものあいだ間違いなく続いてきたという、民衆の歴史エネルギーというのは、やっぱりすごいものだ。都市のさまざまな地域の民衆が趣を競い合ったという、それはまさに都市文化そのもので、いろいろなデザイン競争だったということです。

二番目に、大文字の行事を見て出てくるのが、脱モデルと再モデルの二つです。都市の文化を考えていくときに、もともとあった村性とか集団性とか、閉じた凝集的な力が都市になっていつて開かれるという考え方を脱モデルといいます。脱モデルで都市は考えられやすいのだけれども、趣を競い合いなかで、もともと自分の持っていた文化をもういっぺん再構成することが起こってまいります。自分の伝統というものが都市においてより強く意味づけられて、もういっぺん強く主張され再構成されるといのが再モデルです。もともとの歴史性や文化性が抜けていつて、他者と交わるような都市性がうまれるという論はよくあるのだけれどそうではない。つまり、それぞれの文化はいわば競い合うことによつて主張し合うということもあり得る。それを「再モデル」という言葉で言っています。祇園祭であつても、大

文字であつても、それぞれが主張していたら、全体の都市像というのは出ないわけです。どこかで、この空間を共有しているんだというような軸も出るはず。そうであるからこそ都市のお祭りになるわけです。

二番目は、地域儀礼と都市祭礼という観点が重要になります。儀礼過程を見ていくと大文字行列というのがあります。山で朝から昼と準備をして戻り、夕刻になると松明行列で登つていきます。衣笠街道町、高橋町、北高橋町、尊上院町などのまちまちに灯火を、松明の篝火を付けております。それが旧大北山という大文字保存会の地元になるわけです。法音寺は左大文字保存会の人たちの菩提寺で、ここに火の道ができます。夕方、篝火の火をつけると道ができて、お精霊(しらい)さんが帰ってくるようになっていきます。ここに集めて、この地域一帯に集火的な火を山にとりあげるといふ構造になっています。

法音寺でお経を唱えてもらつて、施餓鬼、餓鬼に施しを与えて、迷える霊を鎮めて、この地域一帯の祖先霊が帰るようにします。保存会会長が塔婆を受け取つて、松明行列をして山に登つていくという手続きになります。その年に市長表彰を受けた人や二十年、三十年奉仕した人が大松明を抱え、隊列を組んで大文字山に上つていく。北山地域社会がここにあるわけです。北山金閣寺不動講。尼講(北山尼講)、北山観音講のようにみんな北山が付いています。

だんだんと地元のまちまちを歩いているときに、「頼むで」とか「何々ちゃん、おめでとう」という声が聞こえます。自分たちのまちの精霊、お精霊さんを連れて行つてくれという、土着の地元の儀礼ということ。つぎに、行列に手を合わす人とか出てきて、市民の儀礼になつていくというかたちになり一般に開かれてくるのです。

松明行列が西大路通を渡るのですが、信号があつても西陣警察署の警察

官が二十名ほど来て隊列の道をつくります。つまり、地域社会の日ではなくてもうすでに市民の日である。市民全体の、あるいは観光、旅人も含めて、全国の代表的な盆行事という意味で普遍性の高い日になっています。伝統的な北山地域社会の儀礼から、市民の、あるいは全国の人々も祈る盆儀礼という開かれた市民文化になり、日本文化の代表とされるというふうに関わっていくのですが、実は火をともし瞬間でまた地元性が出ます。火をともしとき保存会会長が「第一画、ともしせ」から第二画、第三画というようにやるのですが、「大北山万歳」と言います。「大北山万歳」と言うて、われわれの北山地域の伝統文化財産であるという意識がわあつとでる。では、そのまま地域の儀礼に閉じているかと言うと、そうではなくて単純ではありません。

大文字がともしるときには、まちの火を消しましょうということ、8時に近づくにしたがつて、まちの火がぼぼと消えていくのです。「北山地域社会万歳、俺たちの伝統文化だ」と言っていたん閉じますが、上の天界から見てみると、自分の活動を市民たちが支えているという実感です。つまり、最初は閉じた地域社会人になるのだけれど、俺たちは違うんだ。ほかの地域文化、ほかの四山にも負けない非常に深い都市文化を持ったところにも対抗しています。

護摩木信仰というものがあります。北山金閣寺不動講社の山の火をともし木の材料に、市民もいろいろな多様な信仰を寄せるわけです。もちろん各大文字保存会、松ヶ崎妙法保存会、船形の保存会、左大文字保存会、鳥居形保存会、万燈籠保存会、それぞれの保存会への木を書き、折りごとを書いた護摩木があるわけです。マツの割木に願いを書いて、集めてとします。ここをだいたい一万二千本から、年によつては二万本ぐらいです。一〇万人の多くの祈りがこれに乗せられるわけです。まさに市民

的行事になります。(文責編集部)

以上、講演の一部を要約してみたが、当日は沢山の資料やスライドを用いて熱心に語っていただいた。詳しくは著作の『左大文字の都市人類学』(弘文堂一九八七)や『大文字の都市人類学的研究』(刀水書房一九九六)を参照していただきたい。

《協会の今後の事業予定》

1 研究会 第二一回

日時 二〇一〇年六月三日(木)午後二時～三時五〇分
会場 からすま京都ホテル(下京区烏丸通四条下ル)
演題 「香―何故、京文化」
講師 畑正高氏(松栄堂主人)

2 総会

日時 二〇一〇年七月十日(土)午後一時二〇分～五〇分
会場 読売京都ビル(中京区烏丸通六角下ル)
内容 二〇〇九年度決算報告と新年度事業計画 他

3 講演会

日時 二〇一〇年七月十日(土)午後二時～三時五〇分
会場 読売京都ビル(中京区烏丸通六角下ル)
演題 古代丹後半島と丹後王国
講師 山田邦和氏(同志社女子大学)

4 見学会

日時 九月二十日(月)～二十一日(火)を予定
内容 バスをチャーターして丹後半島を見学予定

